

ハッピーマンデー制度

池松 孝子

先日、イタリアからの友人を案内して関西を旅行した。彼女の希望でまず三十三間堂へ行った。意外にも春節の混雑もなく、静かに楽しむことができた。

かつて京都の成人の日の行事の代表的なものと言えば、三十三間堂の通し矢であった。本堂の西側で六十メートル離れた所から矢を射り、的に何本当てられるかを競う「弓始め」だ。通し矢は、元々旧暦一月十五日頃の最初の満月の日に元服を行ったことに由来するという。テレビのニュースなどでも、成人した女性が振袖、袴姿に襷掛^{たすき}けでのを狙う晴れやかな様子が放映されていた。四百年の歴史がある行事、これが成人の日であった。

日は永し三十三間堂長し

夏目漱石

ここで思い出すのがあのハッピーマンデー制度だ。一部の国民の祝日を月曜日に移動し、土、日、月と三連休にする法律だ。二〇〇〇年に施行された。対象となる祝日は、成人の日、海の日、敬老の日、スポーツの日である。週休二日制が浸透したことから、さらに三連休を作ることによって混雑を分散する。加えて連休の増加による経済の活性化を大きな目的にしたのだろう。

しかし、その効果に対し疑問も出ている。当初の思いとは違い、三連休の混雑はさらに集中し、期待した経済効果も不明だといわれる。さらに祝日の本来の意味の希薄化、意義の低下などの意見も強く言われている。二〇一〇年には祝日改正法の廃止(元の固定日へ戻すこと)も検討されたが、いまだにハッピーマンデー制度は存続している。祝日、本来の意義を第一にするべきではないだろうか。本来の意味を忘れたものではあつてはならない。歴史あつての祝日であると考ええる。

卑近な例だが、私の誕生日は「海の日」、弟は「敬老の日」と答えていたのだが、今や「日替わり」ならぬ「年替わり」になった。また、非常勤講師として働く友人は、月曜日は出勤日にならない、授業を入れない。なぜなら単純に収入に係わるからである。